

COSMOS集



オリオンやシリウス見つけ冬を知るこんなに温い霜月の夜に
道長の月 内山紀子*茨城

水上 芙季選

「あすなる集」特選

近づくこゑ

阿部 則子 北海道

神無月出雲大社に神々の集ひたまひて神議かみはかるといふ
白鳥の近づくこゑにカーテンの端よりのぞけば月の輝き
絶滅の野鳥の類に入るといふ雀の囀りしみじみと聴く
雪の降り解けては降るの根雪前窓辺によりて雪をながめる
不自由とは心身きたふることらしくバスの通らぬ肉屋へ歩く

一番 星

千葉 喜恵*岩手

教科書の平面で見た数字を動く立体で多面的に見る
亡き父が見た水戸黄門のテーマ曲歌詞の良さ知る古稀ちかづきて
西方の一番星をながめつつ先祖の田畑を荒らしてばかり
彗星のニュースを見てて不思議なり長々と飛び軌道はずさず

手編みくつした

神谷 倫子 埼玉

歯の痛みこれまで知らず八十二手入れ上手と医師にほめらる
亡き夫はいまだ戸籍をもつごとくゴルフセールの案内届く
やうやくそとでに外出する気の出できたり夫逝き四年目闇を抜けしか
アデスの手編みくつした手にすれば温き編み目に乙女ら想ふ
コンロ出し炭火でさんま焼く娘らはにほひも馳走と十尾焼きあぐ

パセリ

人見 江一*神奈川

小肥りの方が長生きする説に勇氣をもらいダイエツトせず
自然界に分相応のルールあり小さき花には小さき蝶来る
黄揚羽の子らはいつしか旅立ってパセリふたたび葉を繁らせる
定年後勤めをすべて退いたいま晴れて歌人の一歩踏み出す
白秋の愛でた甘柿禅寺丸白秋を慕った父に供える

鈴木 竹志選

小顔のダンサー

五十嵐 トシエ 新潟

スマホ持ち友と「JIN」の練習す八十すぎて真剣な目で
足長く小顔のダンサーに驚きつつ「キウ・クラシック・バレエ」観る
バレエ「くるみ割り人形」を真近に観キウウの人の心根おもふ
少女趣味と言はれても良し紅葉の落ち葉手にして桜堤ゆく
キヤタビラーが通りし後の雪原に似た雲ひろがる秋の大空

目高を飼ふ

石田 美智子 新潟

西空にほつたりとあるスーパームーン優しく笑まふ母のごとくに
庭草に隠れて咲ける茗荷の花 ここにゐますと淡々とさく
結婚は〈忍〉の一字といふ友が夫と落語を聞きに行くらし
煎餅にアンパンマンの絵をかきて炭火に翳すひと時たのし
なにゆゑか目高を飼つてみたくなりバケツに五匹を朝夕のぞく

お守り

星野 尚子*新潟

苦手とか怖いからとか怯えてる今日お守りはジャイアンにしよう
「お母さん」の名札をつけて16年わたしの中のほんのひと時
小出駅娘の帰りを待ちわびる私に寄り添う雨降りお月さん
充電が切れたと娘が力尽き私の肩でうたた寝をする
ぐりとぐらいやだいやだのルルちゃんもスイミーもみんな天国に行った

朝 仕 事

大沢 律子 岐阜

南国の土佐の高知に移り住む友よその後は如何に 逢ひたし
空飛べば南国土佐なんぞそこなるに今のわれにはあまりに遠し
土佐なれば牧野富太郎氏の生地なりかの植物園を友は訪ひしや
朝仕事ひと通り終へいつときをおしやれなケーキもなくて番茶飲む
百均の草刈鎌は手に軽く土手のあら草心地よく刈る

明るき寡婦

梅 沢 佳子*静岡

喜寿を越え明るき寡婦を目指しゆく笑みもて今日も感謝忘れず
開頭の術後の友の初の声待ちたる春の訪れに似て
放射線・抗がん剤の治療葉受け生きゆくと明るき声で
枝元ゆ紫色に変わりゆく紫式部たおやかに伸び
朝刊に闘志を燃やせと占いのあれば一日弾みて暮らす

水上 比呂美選

にゆるりら

岩 館 澄江*愛知

ストレスの要因すべて消したけどくるしいニヒリズムがくるしい
やどかりを宿からひっぱり出したとき出るにゆるりらのせつなさを見る
なぜそこにいるのと言わんばかりの目こちらに向ける庭のらねこ
ひよとりはほかのとりよりひとまわりおおきくてふてぶてしいとりだ
この国の拍とわたしの韻律が合わなくていま桃が食べたい

ほくなど置いて 田原五郎*京都

幼虫の食する葉っぱ探す蝶また羽ばたいて秋の陽だまり
便宜上便宜的にと処世する消えてなくなるほんとの自分
いらだつて古びたドアを閉める朝時計は進むほくなど置いて
まだあおいみかんの皮を剥いていく自分の殻に爪たてるよう
陽ざし浴び芝生の椅子がおとす影通りすぎてく時間に似てる

暖炉の火 芝崎千鶴*和歌山

折々に鹿の声聞く里山に砂防工事の車両が入る

エプロンは粉で真つ白店長の声が優しい(パティスリークマン)
Tシャツを仕舞えぬままに霜月になりて漸く今朝の空は秋
平安の時代の女御用いしと聞けば藤袴かおりたおやか
トランプ氏の背後に映る暖炉の火ニューヨークはああもう冬なのだ

耳まで流る 梶 薫子 鳥取

喜寿を過ぎ動けるうちにと小旅行四人姉妹の箕面温泉
雨音が激しく落ちてトタン屋根トタンタタンと太鼓のリズム
リズムよく歩く女人のスマホから流れる曲は「遙かなる影」
仰向けに点す目薬の一滴が耳まで流る的外れて
仮名ばかり多くなつたと独りごつ寝しなに日記を書きあふる母は

くすの木十本 樺 か乃 広島

野萱草刈れば昭和のひとこまがゆらり出てくる草いきれして

くすの木が十本並ぶ迫力をもう受け取れぬ車の窓に
手のひらをぱつと開けばここにある中途半端なわれの運勢
落葉の楓踏みつつゆく道に待つてゐさうな昔の家族
再会は夢のまた夢比婆山の千の裸木に眠りが兆す
松尾 祥子選

楽 車 井下裕子 愛媛

発表会にピアノではなく仲間らとアルトサクスを吹くといふ孫
孫の吹くサクスの曲に合はずやう会場の手を打つ音の増ゆ
真夜中の楽車だんりにつき娘と孫らと八年ぶりに吾も歩みだす
横笛の清らかな音の聞え来るみこしの前に少女ら吹きて
お旅所に楽車揃へば提灯をゆらしてみこし四台入り来

どんぐりひとつ 尾花照子*福岡

夕光に恒星となる女郎ぐもかかる落葉を惑星にして
ゆうぐれに友をよびとめ少年はどんぐりひとつ手わたしており
秋の野にザラメ砂糖の陽をうけて子らは駆けゆきゆるるふらここ
虫の音ははつりととぎれ銀杏ぎんなんの影ふかくする寺の月かげ
蝸ななかの声のしみいる山水はきらめきながら胃の底へおつ

通 潤 橋 石本洋子 佐賀

通潤橋の水飛沫みづしぶき浴び小四こごの童らは声あげ小躍りをする
県道をのたのたと行くトラクターこの田舎路に渋滞起こす

午前九時鵜つがひの番は飛んで来てで熟せる柿を上下より食む
秋空けんくわまつりに喧嘩祭の大鼓の音聞けば血騒ぐこの老いの身も
ハーモニカコンサート明日に迫り来て「青い山脈」十回復習きざらふ

庭 見 世 酒 井 恵 子*長崎

秋を呼ぶくんちのしゃきりが聞こえぬ活気増しゆく長崎の街
庭見世にならぶ伊勢海老活きておりじわりじわりと籠をはみだす
庭見世にひときわでかい翻車魚は長崎人の心意気なり
「ホーライコ」の掛け声太し鯨太鼓根曳の手から離れて宙に



福士 りか選

「その二集」特選

ふ わ ふ わ く どう れいん*岩手

ドラム式洗濯機きて家じゅうのタオルふわふわ暮らしふわふわ
断捨離と呼ばれたくない捨てながら捨てられようとするこのこころ
にんじんがすりおろされてラメのようさみしがりの画家の焼くパン
別れたと言われて「そう」とだけ返すその地下道を出れば川だよ
雪と冬書き間違えて「今朝冬が頬で溶けました」そのまま送る

鯖雲が鯨のように集まりぬきよの青空深海のごと

宗 谷 岬 初音左近 鹿児島

どの家も二重扉の玄関をもちて並びぬ北国の町
風強く白波高く雲低し宗谷岬の向かうはサハリン
西空に残月ありぬ青天の海をフェリーは礼文へ向かふ
桜島のやうに見えたり利尻岳とんがり頭が雲に覆はれ
雪の日も船を導く赤灯台背後に礼文のなだらかな丘

カラスウリ 水鳥葉子 茨城

枯れ藪に電飾のごときカラスウリあかく灯れば日暮れは早し
老猫を幼なのやうに抱きあげて嵐の前の風を聴きをり
しむしむと美白クリームぬる夕べ湯宿の庭に落ち葉降り積む
独楽といふ名前は美しく哀しけれまはりきはめてコトツと倒る
落ち葉降る林をゆけば陽のさしてしみじみひとりゆたかにひとり

あぶあぶ 谷川 恵 埼玉

ぶだうぶだう ひとつぶもげばひとつぶん遠ざかりゆく秋の鈴の音

ひとつぶの巨峰に映る月の海　みつなき海をそろそろと剝く
あたらしく発見されしメルセンヌ素数の孤独たれか知るらむ
柿ひとつ桃はふたつを食べ終えしわたしのなかに木枯らしは吹く
右脚にほのやはらかき気配して目をやればみどりこのあぶあぶ

泣くときに

吉本美加*神奈川

集い来て歌えど唱えどお祈りは誰もがひとり雨の日のミサ
秋ばかり映す眼を顔に乗せ赤いトンボよどこまでもゆけ
泣くときに飲もうと思つてレジへゆく少し値のはるココアを持つて
「お母さんごめん」の遠い夕まぐれコンビニ味のおにぎりを食む
真昼間のスワンボートでぼつらぼつら吾子は話せりケンカのわけを

沈む秋草

松下誠一*東京

無音にはなることのない闇に居て水面になにか跳ねた気がする
秋の日の鋭く差している窓にカーテンを、レースのカーテンを
無気力を花に与えているようでふたたび秋の土手をふらつく
ぼろぼろのじてんしゃ雨に晒されて、その形に沈む秋草
人並みに常磐線の混雑を苦しむ目には海の暗さが

影山 一男選

図書館へ

佐藤弥生 新潟

さくら見む東京に行き上野めで大和吉野に一日花見む
桜のさ、東京のとに上野のう、大和のや吉野のよ、一日のひ

とほき世のスフィンクスの謎のごとつ多つきながら図書館へ行く
書庫の奥一枚の絵の少年は小川でドルフィンとらへてわらふ
詩の秘密きみの詩集に知りたくて『あむばるわりあ』の表紙を見つむ

ことのはの神

椋本信枝 静岡

事任八幡宮のことのはの神よ切除の子囊かへして

奥つ城に父母訪へば立冬の富士の初雪目の前にある
土葬なる曾祖母野辺に送りし日はるかゆたかに風のながれた
ヒマラヤにブルーポピーを描きにゆく八十二歳を思ひ目をとづ
天空の茶園に玉露ふふむとき雲の一朵になつて流れた

夜の図書館

小田沙也加*愛知

Xで見知らぬ犬や猫たちの計報が冬を呼び込んでくる

本当は悪態ばかり　飲み干したコーンスープのざらざら撫でる
恨むべきかそうでないかが分からないフィクションすぎる箱庭療法
心配のふり酔つてもできるんだガトーショコラの粉砂糖散る
なんとなく救われたくて逃げこんだ夜の図書館迷子になれない

どくだみの花

谷口久美子*三重

中秋の高き夜空に昇りきて冷たき光で我をつつみぬ

暑きなか季節にはぐれカトレアの真白き花はかおりを放つ
よこしまな心を持つはやめておけ　白き十字のどくだみの花
悪しき夢食むとう糺を身に飼えば夜はふうわり宙に舞うらむ
水滴がぼつんぼつんと瓶に落つ　耳もとに聴く君のバリトン

地下鉄の地図 川田 ゆかる*大阪

出社前土佐堀川とむかいあうふりして我と向かい合つて
眠つて人の呼吸がぶかぶかと魚を模した地下鉄の地図
粒々となつて飛びゆく渡り鳥 ワイ フアイ よりも遠くとおくへ
セメントでできあがつて街なみに夕陽のかわりの信号の赤
飲み干したビールの缶をへこませて鳴子こけしのとなりに置いた

原賀 櫻子選

音の終点 八木 かおり 奈良

押し照るや難波見おろす生駒嶺は山ひだ見せず紅葉に備ふ
踏切をゆつくり過ぎる夕ぐれの列車の窓に私はをらず
寝る前の服薬の水を白湯にせり足先しんと十月末日
オルガンの白鍵二本また同じ音を修理す ありがたう「ド」「ミ」
三階席最後列で受けとめるホールに響く音の終点

公 式 戦 山 添 葵*奈良

中学校2年生ですこんにちは！山添葵☆コスモス入会
かるた部と茶道部はちゃんと行ってます科学部は2回だけのユーレイ
「はるす」「ひさ」「いに」「しの」「おおえ」「おく」「め」「よを」私の好きな百人一首
初めての公式戦は信貴山杯 震える指を札へと伸ばす
栗入りのういろう食べる控室 二回戦まであと三十分

月の金木犀 山添 聖子*奈良

午後四時の白球寮のペランダに干しっぱなしのTシャツ一つ
月光の甘き匂いに知る今宵、月の金木犀も満開
鈴虫の鳴き止む夜のしじまには爪を切る音大きく響く
本棚の『ぐりとぐら』子と読み返し今日のおやつにカステラを買う
ついてきた吾子は土足にためらいぬ投票所となるふれあい会館

蔵 通 り 市 場 美佐子*鳥取

高圧線のあいだに半月はさまれて窮屈そうだね歩くわたしに
朝顔は涼しさ求めん葉の陰に内向きに咲く去年も今年も
蔵通りのそぞろ歩きに軒先の蜂の巣さえも旅情をさそう
マスクつけ帽子を深く被りても「おとしよりよね」声が聞こえる
AEDをLEDという人のありてやわらぐ救命講習

盛 塩 原 万 紀 長崎

みかん畑の風の香りよ友の子の自裁したるは噂ではない
何事もなかりしごとく日常の生活くらしに戻る喪服仕舞ひて
田の神の盛塩ひく低め秋時雨いづこへ移るや夕べ過ぎゆく
藁の上、手足集めて眠る猫伸び来し夕日しばしとどまる
小みかんをいただき百円箱に入るコスモス揺るる無人の店に